

## 《コーディネーター 森口健司》

### 生涯の絆が生まれた中学1年の家庭訪問での語り合い

この後、伸二さんに話をしてもらおうんですけど、私が29年前、35歳の時に初めて中学1年生を担当したんです。その私のクラスに彼がいました。

(力強く)家庭訪問が昨日のここのようによみがえるんです。正面にお母さんがいて、横に伸二さんがいて、彼の向かい側におばあちゃんがいました。「ああ、この子はこの家族に愛されて、大事に大事に育ってきたんだな」と思いました。

(身体中で語りかけるように)その時に語った部落問題は、ずっとその後の絆をつくっていくこととなります。おばあちゃんの部落に対する思い、お母さんの部落に対する思い、後に、聴かせてもらうこととなるお父さんの思い。そういう思いを語り合った関係というのは、ずっと残るんですね。

小学校6年の時、日産スタジアムで開催された陸上競技の全国大会、ジュニアオリンピックにおける走り幅跳び全国3位の写真入りの額が飾られていました。私は、柔道で賞状やメダル、トロフィーをもらったことがあり、それを私の祖父が大切に額に入れて飾ってくれたり、メダルやトロフィーを飾るケースを作ってくれたりした思い出があります。そのことが当時よみがえり、心が熱くなったことが思い出されました。

この子は、この家族の誇りになっているなということを思いながら、子どもというのは、家族の深い愛情の中で幸せになっていくんだと思いながら、思いを語り合った家庭訪問となりました。

この伸二さんの学年が中学3年になった時に、中学生集会在がスタートしました。いろんな人を巻き込んでいきます。(いっぱい笑顔で)昨年中学生集会的のパネリストをしたということで、今年度も、中学生集会的の第1回、2回、4回の実行委員会的の参加してくれました。8月が本大会です。その時に、サラッと映像を撮って「PR動画」を作ってくれたんです。この会的の始まるまでに流した的是「鳴門のフォーラムのPR動画」です。まず、伸二さんが作ってくれた今年度的の「人権を語り合う中学生交流集会的のPR動画」を観てもらいます。1分30秒の動画です。

### ＝映像 2023年度人権を語り合う中学生交流集会的のPR動画(1分30秒)＝

※この映像は、T-over人権教育研究所のホームページでご覧いただけます

この映像は、2人のお嬢さんを連れて参加してくれた7月22日(土)の第4回実行委員会から作ってくれたPR動画です。彼は学校の先生でもないし、中学生集会上に参加している生徒とずっと一緒にいるわけでもないけど、子どもたちの姿をいきいきと表現する動画を見事につくってくれる。彼のようなすごい仲間の力を結集しているのが、T-over人権教育研究所なんです。

この動画に感動した私が、「もう1つ、鳴門のフォーラムのPR動画を作ってくれん？」と話したら、「やりますよ」と軽く言って、わずかな日数で、ここ10年近くの膨大な鳴門市人権フォーラムの動画や写真を駆使して、本日的の開会前に繰り返し上映したPR動画を作ってくれました。

この映像の中には、広島大学名誉教授の原田彰先生という、1990年度から積み上げてきた板野中学校の同和問題学習の授業記録を分析してくれた先生が映し出されています。原田先生がのフォーラムのフロアで語ってくれた姿、終了後の交流会で、原田先生の呼びかけで、最後に「サライ」を歌うんですが、先生の歌っておられる姿。そして、95歳を前にして、フロアでマイクを握って語っていただいた佐藤文彦先生の奥様、佐藤芳子先生の写真も映像に収められています。この先生の写真を入れてほしいと頼んでもないのに、様々な感動がよみがえるPR動画になっているんです。本当にすごい感性だと思います。それでは再度、20

23年度鳴門市人権地域フォーラムPR動画を観ていただきます。

## **＝映像 2023年度鳴門市人権地域フォーラムPR動画(1分30秒)＝**

**※この映像も、T-over人権教育研究所のホームページでご覧いただけます**

このPR動画は、この映像に登場するすべての皆さんに、映像を事前に観てもらったんですね。ご覧いただいた方から質問がありました。

「自分自心」という言葉についてです。

これはすごい言葉です。

伸二さんに確認したら、「これは仏教の言葉です。」と言いました。

「何に対しても、自分の心(自心)と向き合うから、次のアクションにつながる。閉鎖的な心では、受け入れ態勢も整わない。自分を理解し、自分を知る。自分の心と向き合うことです」と返してくるんです。

この感性の豊かさに感動です。

そして、最後に「自分を越える」「昨日の自分を越えていく」人権学習の本質がここに 있습니다。

(温かいまなざしで)いっぱい持ちあげたからしゃべりにくいんだけど、お嬢さんの前でもしっかり語ってください。それでは、中野伸二さんです。拍手をお願いします。(大きな拍手)

## **《パネリスト 中野伸二》**

### **中学生集会と人権地域フォーラムのPR 動画**

こんにちは。(会場より「こんにちは」声が返る)大分長くなると思いますので、座って話をさせてもらいます。(楽しそうに)まずは、動画を作らせてもらったのは、単に作りたかったというのもあるし、やっぱり、中学生集会の場合は、運営委員会の方に向けて僕は作りました。自分たちが出ている映像を観たら、これから中学生集会をやるという強い力になるかなと思いました。

人権フォーラムの件は、軽く引き受けましたけど、これは、自分も出るし、自分のポジションもわかってないといけませんよね。2～3日、どれがいいかなと迷いました。それに、莫大な量のデータを送って来るんで、(会場に笑いがこぼれる)見るのに必死で、でも、映像に僕も魅了されて、人に与えたいという共に動く瞬間をとったり。

それと、もう一つ映像で言えば、先日、娘が保育所に行っていた時の友達と今も5年経つんですけど、続いています。その友達と、「つながり」というテーマにした動画を作ろうということで、仲のいい6家族、7家族で集まって動画を作って、運営委員会みたいなのをちゃんと開いて、ここをどうしようか、ああしようかと、子どもにも大人も絶対何か役をつくって、みんなの前で何かすることによるこびを感じるということをして、来年は、今年の参加者が、自分の知っている一家族を連れてくるということで、どんどん増やしていこうという趣旨のことを、娘のおかげでやらせてもらっています。

### **自分のターニングポイントとなった昨年度の人権を語り合う中学生交流集会**

(気持ちを切り替えて)本題に入らせてもらうんですけど、ここにも載っているんですけど、僕の中ではターニングポイントというのがありました。去年、中学生集会で吉成先生がおっしゃっていたんですけど、それよりも1年前、八万中学校で話をしてからは、娘に言うだろうなというのは、徐々に徐々に来ていたと思います。

今日、前には同級生の子の隣に中学の時の担任の先生も来ていらして、小学校の時の先生もまさかの出会いがあって、娘も来ていて、娘の担任の先生も来てくださっています。(いっぱい笑顔で)すごいうれしいことです。ありがとうございます。

(生き生きと)1年前、2年前に、娘に言うかどうかというのを、友達のたっ君と、結構、ずっと話をしていました。「言った方がいいん違うか」「いや、言わんほうがいいかな」、そんな話を会う度にしていました。僕がこういう話をすると、たっ君は意外と逃げるんです。でも、そういう話がサラッとできる関係性である。

去年行く時の話を、パンフレットでは載っていない部分ではあるんですが、まあ、相当の覚悟がありました。昨年の中学生集会の時は、本当に娘の目が見られなかったです。でも、今はあそこに娘たちが2人いるというのがわかります。自分の中では絶対に言うというのは決めていました。そして、「彼女たちは差別されるであろう」と勝手に決めつけていました。

でも、差別を受けるかどうかよりも、人権という部分で、「いろんな差別ときちんと向き合っていける子どもであってほしい」というのは、自分の中で思います。見え隠れする部落問題もあるけれど、目に見えたいろんな差別もあるし、自分の中でちゃんと処理できる大人になってほしいという部分が大きいです。去年の、娘を連れて中学生集会に行く前に、僕の中では、部落問題で、自分が地区であるということ、部落であることの自覚、自覚というたいそうですが、今でもピンと来ていないとは思いますが。連れて行く時に、車の中では無言ですよ。当時4年生で連れて行きました。

学習会の場所を「塾みたいところ」とずっとごまかしてきたので、「学習会」という言葉も娘の前では言えませんでした。「学習会って何？」と聞かれたら説明しにくい。何か聞かれるかなという気持ちもありました。ただ、子どもは興味本位で聞いてくるだけとは思いますが、無言のまま中学生集会の会場に行きました。

会場に行く時に、自分の中で「言う」と決めていたので、自分が小学校・中学校で通っていた学習会の会場に連れて行って、「塾みたいところって言っていたのが、学習会っていう場所だな」という話を、(温かな笑顔で)ここでこういう遊びをしてとか。当時、「土農工商っていつてな」というような江戸時代の話とかをしたら、娘は可愛いもので、「ここって徳川家康が居ったの？」という言葉も出てきました。「なんて可愛いんだ」と思いながら、若干ウキウキしながら中学生集会に行きます。

## **娘のいる場で自分のことをきちんと言えた自分の後押ししてくれた小学校の先生方**

### **～校長先生と～**

中学生集会の中で、言う決めて、「言っても、娘はわからんだろうな。何を言っているんだろうと思うだろう」というのはあったんですけど、(一言一言、当時の思いを確かめるように)娘の目は見てやれなかったんですけど、でも、きちんと言えた自分があって安心した部分がありました。

「言えた自分」というのを後押ししてくれたのが、今日来てくださっている娘の小学校の担任の先生です。学校の力添えというのがありました。娘に伝える前に、学校にまず説明に行きました。校長先生がおいでで、校長先生と話をしました。「実は僕、部落の人間で」ということを校長先生に話しました。校長先生も「やっと来たか。このワード」という感じでした。「私は、この教育が、今だんだんきんようになってきているのが腹立たしい」という言葉を頂きました。僕も安心して話ができました。それから、校長先生からも自分の生い立ちであるとかしんどかったことなどを話して下さって、お互い、涙涙での校長室の話になりました。

### ～担任の先生や教頭先生と～

(生き生きと)そして、娘の担任の先生ですが、4年生、5年生と担任していただいています。すごい熱のある先生で、個人懇談に行っても、娘の話はさておいた感じで、お互いの気持ちをぶつけ合うような感じです。先生にもいろいろな過去があり生い立ちがある。そんな話も聞きました。「中学生集会に行って、立場を伝えていこうと思うんです。娘を連れて行こうと思っています」みたいなことも話をさせてもらいました。そうになったら止まらないですね。すれ違いに教頭先生に、「実はね」という形で、小学校の先生3人に話をさせてもらいました。それで、そういう後押しがあって、中学生集会で話ことができました。家に帰ってきたら、このパンフレットにも載っているんですが、娘の口からも「部落問題」という言葉が出てきたりとかしました。

### ～職員研修の場で自分のことを語らせてもらって～

そういう中で、すごく居心地のいい小学校で、校長先生が粹な計らいをしてくれて、「中野さん、これを職員の前で話してみませんか」ということを言われました。僕のためではなく、職員のために話してほしいと言われました。やっぱり、若い先生というのはわからないという部分が多いということで、リアルな話というのを、僕の言える範囲で、伝えさせてもらいました。

学校は、そこまでステージを与えてくれました。先生によっては、話の間、最初から最後まで涙で、ずっと泣いている女の先生もいたし、終わった時に、しっかり思いを返してくれた人もいるし、「今まで自分は、先生として子どもたちと向き合ってきたつもりではいるけれど、やっぱりできていなかったな」と言ってくれました。「こんなのではだめだ。子どもと本気になるってどういうことなのかな。もう1回考える」と言ってくれた先生もいました。

### スマホなどネット情報が簡単に得られる現代社会の中で

僕の中の部落問題は、娘の中に執着している部分があります。というのは、学校教育の中で、「同和教育」というのが、これからワードとして出てきます。中学生になると特に。そんな中で、最初にも話しましたが、「自分の中でちゃんと処理できるか」という部分もあるし、今、子どもたちもスマホとか持っているので、知らないところで、「部落問題」というワードが出て来た時に…。今、子どもたちも動画配信などをよく見えていますよね。

先日こんなことがありました。ティックトックを見ていた娘から、「狭山事件って何？」って言われました。何も知らない娘からの言葉に「おおっ！！」っとなりました。引きました。娘が見ていた映画の中でのやり取りの中で、「狭山事件」という言葉が出てくるんですけども、知っているのだったらまだしも、知らずに言える感覚というか、本人は全然悪くないんですよ。その重みというか、中身というか、これから知っていくであろうと思うんですね。

だから、今だと、自分で勝手に調べられるし、出会う気もなくとも出会ってしまったというケースもいっぱいあると僕は思っています。だから、「勝手に見て、勝手に傷つくな」ということが言いたいんです。その前に、僕の方から親としてちゃんとしたこと、間違いではないということ、差別をされるのではないという部分、自分でちゃんと理解する。でも、もう一つ苦しいのは、周りの友達がそういう境遇にあった時に、どうフォローしてあげられるかとか、どう助けてあげられるか。スルーしないような子どもになってほしいということもあるし、そこまでの用意もして娘と向き合いました。本当にいろいろあったんです。中学生集会のおかげで。

小4というのは、説明するのは早いかなとも思ったんですが、でも、柔軟性のある子どもの方が処理能力も高いし、これは間違っていないと心底伝えたら、大人になっても、間違っていないという感覚のまま居れるんだなというのもありました。去年は、僕のターニングポイントであり、娘に伝えるというのがテーマだったんですけど、そこからというのは、やっぱり周りを巻き込まなかったらいかんと、勝手に自分で思い始めました。

### **小学校のPTA会長となって**

実は、今小学校PTAの会長をしています。娘が1年生から4年生までは副会長をしていました。5年生になった時に会長になりました。娘が行っている学校は、先生の熱がすごく高いし、子どもたちも小学生なので、みんな生き生きしています。いろいろな悩みをもっている子もいるし、でも、僕が行ったら、6年生の子かな「いつもPTAありがとうございます」と子どもから言うんです。すごいです。「よし、この子らのために頑張らないかな」と常日頃思っているんですけど、PTAの中で一つ問題があります。

いろんな部会があります。「文化人権」やってくれる人がいないんです。部長を誰がするのかということです。その討論がありました。僕は、文化も大事。歴史も大事。人権、もっと大事ということはずっと思っているんで、「それは残した方がいいのと違います？」と言うと、「いや、いらんでしょう。やらんという人ばかりで」と言われるんです。なんか、悔しくて。

すると、ある副会長の方が、「じゃあ、僕副会長と兼任してやるよ」と言って、「文化人権」の部長をやってくれるようになりました。中身がどうのこうのということよりも、「人権」というワードをなくしたくなかった。

### **人権文化担当の先生とのやり取り**

「人権」というものが、目に見えるところから消えるのがちょっと不安で、それで、「文化人権」の担当の先生に話をしました。わざわざ言わなくてもいいんですが、僕のことを理解してもらうには、このことしかなかったです。ましてや、子どもを持っていらっしゃる皆さんですから、僕のこと、僕のテーマを話しなかったら次に繋がれんなどと思って、自分のことを言いました。

「いや、中野さんね。僕は部落ということが一番嫌いなんですよ。僕は人権の担当はしているけれど、そのことについては一切触れません。徳島市内にも、たまに「なくそう部落差別」という看板が立っていますよ。ああいうのが見えた時も、娘に『あれ何？』って聞かれても、『パパは知らん』って言う。そんなことをするからこの差別がなくならんのでしょうか。僕は子どもの頃に、確かに部落問題というのは習ってきたけど、嫌いすぎて出たことがない」という、まあまあの言葉をもらいました。でも、僕は全然傷つかんのです。僕の中では、そういう人もいるであろうということを思っていますから。

まあまあ言われましたが、その人とそういうやり取りができたというのは、僕の中ではいい部分であって。その人が、まあまあ真面目な人で、多分家で娘と話をしたんでしょう。あくる日に、「中野さん、ちょっといいですか」と言ってきて、ちょっと胸をつまらせながら、「中野さん、昨日は本当に申し訳ありませんでした。」急に謝るんです。「何でかな」と思いました。

「なんか、僕の勉強不足だったところもある。ただ自分の考えも間違いではないと思うけど、どうやってこれから関わって、どういうふうにそれをやっていったらいいかなというのは、やっぱり、一緒にいてやってほしい」みたいなことを言われて、「最初は嫌なものだと言ったけど、話すことで、こんなに急に人生が変わることもあるんだなあ」みたいなことがあったんです。

僕も、会長職になって、他校の会長さんとも知り合うきっかけになりました。僕がいるのは、徳島市です。48校、5800人の児童を扱う、徳島市のPTA 連合会というのがあって、ここの「理事」という役をやらせてもらっています。

そこでも、テーマとしていろんなことがあるんですけども、「文化交流」とかいろんな行事があるんです。そこで1年目はあまり言えなかったんですけど、「文化交流、どうしましょうか。誰かいませんか」という時に、僕は、この機会に名前を出したくて仕方がないんですよ。なぜかと言ったら、みんなが知っているから。

満を持して、今年言いました。そうしたら、保護者の役員の方が居られたので、役員の方も、「部落問題、知ってるわ」という感覚なんです。でも、最初はしんどかったです。「中野さん、こうやってするからなくならんのと違うか。そこまで必死にやらないでいいだろう。ハハハ。」みたいな感じで言われて、人間は怖いなと思いました。

でも、僕が言いたいのは、部落問題が僕の中のテーマでもあるけれども、徳島市でやっていくには、部落問題もあるし、いろいろな問題を人権として、これから育っていく子どもたちが勉強していかなければいけないのは、このワードも絶対出てくるし、どこの学校かは忘れましたが、その場にいた校長先生が、「やっぱりSNSでも、どこそこが部落地区ですと出てくる時もある。そういうがあるので、『今はなくなった』とは言えない。だから、やらなければいけないこともあるかもしれん。」という話をしていました。

そういう話をしたら、保護者の中で「部落問題」「部落問題」とグルグルグルグル流れて行って、今年の中学生集会に徳島市の中学校のPTA会長さんが1人来てくれました。お忙しい方なんですけど、フットワークが軽く、そういうことにも興味を持って来てくれて、中学生集会でもしゃべっていただいて、すごく刺激を受けて、どんどんどん、自分の中でつながりが広がっていつているのを、すごく感じます。

### 同じ場所ですべてのことを共有したいというのが僕のやり方

そういう生き方というのを、今しているんですけども、この前、1つ引っかけたことがあって、これは、中学時代からの友達と話しをしていて、僕が娘(A)に言ったということは知っているんです。

その子は、僕の奥さんが言ったよ。

「A(娘)ちゃん、いけてるかな」

あの時、グサッと来てね。グサッと来てというか、裏を返せば、「A(娘)はかわいそうにみられているかな」と思ってしまった部分もありました。

心配されているというのはいろいろな取り方ができるんですけど、

自分の中では、「かわいそうなことをしたかな…。」

(思いっきりの笑顔で、その話をしてくれたフロアーの友人に、「そんな話をしたよな」と声をかける。それに笑顔で返す声に重ねるように)

託也君と話をしていたんです。

「あれからどう？」

「まあ、いけてるよ」

というやり取りをしながら…。

勝手に、「かわいそうなことをしてしまったのかな」と思ってしまう。

そこがすごい、生き方の部分ではあったんだけど、でも、全然そうじゃないっていう部分を、どうしようかなと今も悩んでいて。

(思い切ったように、フロアーの娘の名前を呼びながら手招きし)

(横に座っている学級担任の)先生の前を通過して、こっちへおいで。

(2人の娘を壇上に呼び寄せる)

こんなのをするつもりじゃなかったんですけど。

(立ち上がり、担任の先生の前から壇上に上がることを戸惑っている2人の娘を壇上に上がるように促し、恥ずかしそうに父親の横に立つ娘たちに身体中で語りかけるように)

娘たちを紹介するためではありません。僕がしてあげられることというのは、景色としては、この目の前の景色は良くない。きれいな山でもないし、広い海でもないし、ちょっと年が上の人たちがいっぱいいるけど、これが、パパが見ている景色なんよ。

パパの問題で、仲間が来てくれている。

これから2人が、小学校とか中学校に上がった時に、出会うであろう問題に対して、一緒に考えてくれる人たちがこれだけいるということ。

それを忘れんとってほしい。

向こう側(フロアー)でこちらを見るのと、こちら(壇上)で見るのと全然違うだろう。

これを見せてあげたくて。

これがパパのエネルギーになるっていうことを、この先も覚えていてほしいなと思ってな。ありがとう。(笑顔で降壇を促し、会場の温かい拍手の中、娘たちがゆっくり帰るのを見つめながら、フロアーに向かって力強く)

自分の立場を言ってしまった僕が、娘に対しての責任というのは、体験をさせてあげるとか、こういうところに来させるとか、見せてあげるとか、この問題の中での生きざまというか、背中を見せるとか、同じ場所ですべてのことを共有したいというのが僕のやり方なので、こういうやり方でさせてもらいました。

伝わったかどうかかわからないんですけど、また時間があれば話をさせてもらいます。ありがとうございました。(拍手)

## 《コーディネーター 森口健司》

### 部落出身を隠し続けていく日々に思いを馳せて

(いっぱいの笑顔で、精いっぱい心を込めて)すごい素敵な皆さんの眼差しなんです。本当に教育は眼差しです。本気で聞いている姿というのは、本気で聞いている眼差しというのは、自分が幸せでたまらんといい気持ちになるんです。本気の眼差し、そこに生まれる信頼の絆、そういう関係性の中で、様々な人権問題が「わがこと」になっていくんです。同情じゃないんです。かわいそうではないんです。「わがこと」として歩き続けていくという誇りです。生まれは変えられません。でも、生き方は変わるんです。本当にすごい人生が自分の中に広がっていくんです。

私は教師になって42年です。こんな夢のような人生が待っていたとは、大学を出た22歳の時、想像もしませんでした。大学時代、京都で過ごして4年間、何度も部落差別と出会います。

必死に部落出身を隠し続けていく日々、アルバイト先で差別的な言動に出会った時に、「この人たちが私を部落の人間と知ったらどうなるんだろうか。もう、ここには居れんなあ」と揺れて揺れたこともありました。

下宿に帰って1人になった時に、やっぱり親父やおふくろの顔が浮かぶ。俺は何のために大学へ来たんだ。親は、どんな思いで俺を大学に行かせてくれたんだ。その思いがやっぱり自分を強くしていくんです。

人権教育は、同和教育は、人間が人間としてどう生きるか。人間として生きる本当のよろこびをつかむ学習です。

### **本気で自分自身をさらけ出せる人生はよろこびが溢れていく**

やっぱり、伸二さん、あなたはすごいです。

(笑顔の中で、体中に力を込めて)やっぱり、本当に一番身近なところですよ。皆さんの家庭です。家族です。家族の中で、本気で「わがこと」として部落問題が語れる。部落差別がどこにあるか。家族の中に。身内の中に、親戚の中にあるわけですから…。そのことをどうしていくかということが問われていくわけです。

私は、本当にこの仕事をしてよかったと思っています。それは、毎年出会う子どもたちと、本気で部落問題を語り合えるからです。私たちはみんな、立場は違います。いろんな状況があります。でも、変わっていくんです。お兄ちゃんが「障がい」を持っている、そのことを誰にも言うことはなかった。でも、人権集会で語った瞬間、それまであった卑屈な気持ちが、解き放たれ、お兄ちゃんや家族の思いを堂々と生き生きと語れるようになる。その語り合いによって、その生徒の家族の中に、また誇りが生まれていく。自分にできることを全力で頑張る人生、本当の思いを語れる人生、本気で自分自身をさらけ出せる人生って、すごい人生だと思うんです。

やっぱり、人権の集会というのはよろこびです。エネルギーが湧きます。生きるよろこびが溢れてきます。私は、やっぱりこの関係を大事にしながら、残された教員人生をとことん頑張りたいと思います。